東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

「なると第九」の生成、発展とその現状：鳴門市のまちづくり

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 由佳子, Sato, Yukako メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1428

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「なると第九」の生成、発展とその現状

――鳴門市のまちづくり――

佐藤　由佳子

キーワード：ドイツ兵俘虜　ドイツ館　リューネブルク市　ドイツ村公園　なると第九

はじめに

鳴門市は、ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven（1770-1827）の《交響曲第九番》（以下《第九》と記す）全曲がアジアで初演された地である。もっとも、《第九》を演奏したのは日本人ではなく、ドイツ兵俘虜たちであった。

第一次世界大戦において、日本軍は中国の青島でドイツ軍と戦い、このときに敗れたドイツ兵約 4700 人を日本国内に連れ帰り、俘虜として収容した［田村 2006、3］。この俘虜たちを収容するための施設が日本各地につくられたのだが、その一つが板東俘虜収容所（徳島県板野郡板東町、現徳島県鳴門市大麻町桧）であった。板東俘虜収容所では、俘虜たちにスポーツや農業、文学・音楽活動をすることなどが許されていた。その音楽活動の一環として、大正 7（1918）年 6 月 1 日に《第九》全曲の演奏会が開催された。当時の軍隊は男性のみで編成されていたので、ソリストや合唱も全て男声向けに編曲して演奏された［浜松フロイデ合唱団＞フロイデ豆知識＞第 8 回 日本で初めて「第九」が演奏された場所 板東俘虜収容所］。

そこで、筆者は、現在の鳴門市で、この「ドイツ兵俘虜による《第九》アジア初演」という「記憶」がまちづくりの一つの核とされていることに注目し、「なると第九」といわれるものがどのようにして生まれ、発展していったのか、そして現在どのような状況にあるのか、ということを明らかにしたい。

1　鳴門市の誕生と鳴門海峡のうず潮－「うず潮」は鳴門の代名詞！[1]－

昭和 22（1947）年 3 月 15 日、板野郡撫養町、里浦村、鳴門町、瀬戸町の四か町村が合併して「鳴南市」が発足した。この市は同年 5 月 15 日に市名を「鳴門市」と改称し、鳴門市が誕生した。

図

「鳴門市章」のデザインは、市の誕生の直後に一般から募集され、同年 11 月 7 日に市章が制定された（図[2]）。これは、「鳴門市を代表する「鳴戸の渦」をかたちどったもの」である［鳴門市商工観光課 1973、4］。このように、鳴門市が誕生したそのときから、鳴門海峡のうず潮は鳴門市のシンボルであった。

「うず潮」は、江戸時代にはすでに景勝地として知られていたが、観光地として栄え始めたのは明治以降と言われている[3]。以後、「うず潮」が鳴門市のほとんど唯一の観光名所であった時代は長く続くこととなった[4]。

2　「ドイツ館」開館、そして西ドイツ・リューネブルク市との姉妹都市盟約締結－ドイツ兵俘虜との「絆」にもとづくドイツとの交流－

鳴門市では、そうした状況の中で、「うず潮」だけではなく、それ以外の「強み」をもち、独自色を出して鳴門市を売り出してゆきたい、と考えられるようになった。その動きが表面化するのは昭和 40 年代後半のことである。このときに目がつけられたのは、第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜と地元民との交流であり、鳴門市では、その歴史を根拠に、現在のドイツとの親善につなげてゆこうと考えられた。

そのきっかけとなったのは、高橋春枝という一地元民の行為であった。第一次世界大戦が終わり、ドイツ兵が板東俘虜収容所から引き揚げた後、ドイツ兵に関する地元の人々の記憶はしだいに薄れていった[5]。収容所跡に残された唯一の遺品は「ドイツ兵の慰霊碑」であっ

(1) 「「うず潮」は鳴門の代名詞！」という言葉は［渦の国 鳴門｜鳴門市シティプロモーションーNaruto＞渦潮]によるものである。このような言葉が現在でも用いられていることからもわかるように、「うず潮」は今日なお鳴門市の重要な観光名所である。しかし、本論文で取り上げるように、鳴門市では、「うず潮」だけに頼るのではなく、新たな観光客誘致策が試みられてきた。

(2) 図は［File:Emblem of Naruto, Tokushima svg.-Wikimedia Commons］より転載したものである。

(3) これは鳴門市役所文化交流推進課より得た情報である。なお、鳴門海峡が文部省より名勝に指定されたのは昭和 6（1931）年のことである［岩村 1950、63］。

(4) 例えば、『市勢要覧 1952』において「観光」の項で大々的に扱われているのは「うず潮」に関することである［鳴門市役所 1953、83-84］。

(5) 第一次世界大戦後からドイツ館が開館されるまでの話は［田村 2006、79-83］を参照。

たが、第二次世界大戦の混乱の中で、この慰霊碑は草に埋もれてしまった。戦争が終わり、収容所跡に住む高橋春枝がこの慰霊碑に偶然気づき、以後、慰霊碑を清掃し、お参りし続けた。

13 年間慰霊碑を守り続けた彼女の行為が昭和 35（1960）年 10 月に徳島新聞などで紹介され、そのことを知った西ドイツ大使ヴィルヘルム・ハース Wilhelm Haas 夫妻らが、同年 11 月 29 日に板野郡大麻町[6]を訪れ、慰霊碑をお参りした。

この大使らの訪問を契機として、元俘虜と大麻町住民との交流がはじまった。そして、元俘虜らから、感謝の募金や寄せ書きなどが送られてきた。

大麻町はこれを受けて、昭和 38（1968）年初めに慰霊碑の前で慰霊祭を開いた。

昭和 39（1964）年 7 月 14 日には、高橋春枝に西ドイツ大統領からドイツ功労勲章が贈られた。

こうしたことを機に、「ドイツ館」建設の機運が高まり、同年末に大麻町民は「ドイツ館建設期成会」を結成した。

3 年後の昭和 42（1967）年には、大麻町と鳴門市が合併し、この地は鳴門市大麻町となった。

その後、元俘虜と地元民との交流がいっそう盛んになってゆくにつれて、ドイツやヨーロッパにおいて板東俘虜収容所の話が公に取り上げられるようになっていった[7]。そうしたこともあって、ドイツ各地の収容所関係者から建設中のドイツ館への寄付金や資料の提供が相次いだ。

それらをもとに、昭和 47（1972）年 5 月、鳴門市は、大麻町桧に「鳴門市ドイツ館」を開館した。鳴門市によれば、このドイツ館は、「第一次大戦当時、板東の捕虜収容所で芽ばえた元ドイツ兵士と市民との友好を永久に記念するとともに、今後ますます日独友好と国際親善を深めて」ゆくことを目的として建てられた［鳴門市役所 市長公室 1975、1 月号、2］。

大麻町と鳴門市が合併したのは昭和 42（1967）年、ドイツ館が開館したのはその 5 年後の昭和 47（1972）年だが、大麻町民は昭和 39（1964）年末に「ドイツ館建設期成会」を結

(6) 大麻町は、以前は板東町という町名であった（だから「板東俘虜収容所」という名称であった）。昭和 34（1959）年に板東町は堀江町と合併し、大麻町と町名を変更していた。

(7) 例えば、元俘虜のヨハネス・バートの俘虜時代からの思い出をつづった『50 年ー夢』が西ドイツの新聞に連載されたり、NHK が制作した《大麻町板東俘虜》がドイツ語でヨーロッパに向けて放送されたりした［田村 2006、82］。

成するなど、鳴門市との合併前から、元俘虜と交流し、ドイツ館建設運動を積極的に進めてきた。鳴門市がその流れを汲んでドイツ館建設に動き出したのがいつなのかは正確にはわからないが、いずれにせよ、ある時点で、鳴門市では、俘虜収容所関係者と大麻町民との交流の発展に着目され、市の活性化を、「第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜ゆかりの地」であることをテーマにすえて進めてゆこうと考えられたのである。

ドイツ館は、以後 20 年間、日独交流のシンボルとしての役割を担うにとどまらず、ドイツ兵俘虜の文化的遺産を蒐集し、後世に伝える貴重な資料館の役割を果たすこととなった。

鳴門市では、このドイツ館の開館を契機として、ドイツとの友好関係をさらに発展させたいと考えられ、西ドイツの都市との姉妹都市提携が計画された。姉妹都市の提携先が検討された結果、リューネブルク市[8]が候補にあがり、昭和 49（1974）年 4 月 18 日、リューネブルク市において、鳴門市とリューネブルク市の姉妹都市提携盟約書の調印式が行われた。

姉妹都市盟約締結後、リューネブルク市との親善はきわめて順調に進んでいった［鳴門市史編纂委員会 1999、397-398］。姉妹都市交流は、市の募集に応募してきた一般市民によって構成された親善使節団の相互訪問を中心に展開されてゆき［鳴門市史編纂委員会 1999、397-407］、それは現在まで続いている。

そうして親交を深めていった鳴門市とリューネブルク市だが、その礎となっていたのは、鳴門市が第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜ゆかりの地であり、彼ら俘虜と地元民が友愛の情を育んでいたという歴史的記憶であった。リューネブルク市の親善使節団が来訪した際には、使節団はドイツ館を含むドイツ兵ゆかりの地を訪れ、ドイツ兵士の慰霊碑に献花している。

3　「大鳴門橋」架橋と「ドイツ村公園」建設
ー「ドイツ兵俘虜の遺産」と「ドイツとの親善」をテーマにしたまちづくりー

このように、鳴門市では、第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜との「絆」にもとづく地域活性化が図られはじめたが、しかしドイツ館が開館した翌年（昭和 48（1973）年）や、翌々年（昭和 49（1974）年）、すなわちリューネブルク市と姉妹都市盟約を締結した年に発行された『観光ガイドブック』などにおいて最初に載せられているのは、やはり「うず潮」に関す

[8] リューネブルク市はドイツ連邦共和国（西ドイツ）の北部、ニーダーザクセン州の地方都市で、ハンブルク市から約 50 キロのところにあり、人口は約 61000 人であった［鳴門市役所 1980、29］。リューネブルク市が姉妹都市提携先の候補にあがったのは、両市が製塩をまちの主産業として発展してきた経緯や人口規模などといった共通点をもつためであった［鳴門市史編纂委員会 1999、397］。

ることであり、ドイツ館は注目の観光地としては扱われていない[9]。

その理由の一つには、この周辺一帯が、この時期には、観光地としてまだ整備されていなかったことがある。むしろ、鳴門市がドイツ館を開館し、リューネブルク市と姉妹都市盟約を結んだことを契機として、この一帯を整備する計画が浮上し、進展していったのである。

その背後には、鳴門市と淡路島とをつなぐ「大鳴門橋」を建設する話が進んでいたことがあった。鳴門市にとっては、四国から外へとつなぐ橋の建設は悲願であり、鳴門市を開拓してゆくために必要なことであった。

鳴門市から淡路島へと橋がかかるとなると、それに合わせたまちづくりもまた大きな課題となった。その来る新しい時代のために計画されたのが、ドイツ館を含む、その裏山一帯の地域に、都市計画公園として「ドイツ村公園」を建設することであった。この「ドイツ村公園」は、板東俘虜収容所跡地一帯を中心に、この収容所に「収容されていたドイツ兵士と地元住民との間に芽生えた、美しい友愛を後世に残すとともに、この友愛をもとに、鳴門市とドイツ連邦共和国・リューネブルク市が姉妹都市盟約を結んだのを機に建設」された［鳴門市役所 市長公室 1978、5 月号、2］。

『広報なると』昭和 50（1975）年 1 月号には、この年の鳴門市の展望について書かれているのだが、その「観光開発」の項には、「ドイツ館の裏山一帯に周囲約三㌔、広さ約五十㌶の「ドイツ村」をつくります。〔……〕三〜五年計画で建設の予定です」と記されている［鳴門市役所 市長公室 1975、1 月号、2］。

また、『広報なると』昭和 53（1978）年 1 月号にも、同様にこの年の鳴門市の展望について書かれているのだが、その「観光・産業」の項には、「大規模な観光施設としてのドイツ村公園」の工事を「本年も継続して」進めることが記載されている［鳴門市役所 市長公室 1978、1 月号、2］。

要するに、鳴門市は、本四連絡橋である「大鳴門橋」の完成に備え、まちづくりをしなければならないという課題を抱えていたのであり、その一つとして開拓・整備されたのが「ドイツ村公園」であった。昭和 55（1980）年に発行された『鳴門 ’80 市勢要覧』には、「大鳴門架橋とドイツ村」という章があり、ドイツ村公園は、大鳴門橋がまもなく完成する新しい時代のまちづくりの中核の一つに位置づけられていたことがわかる［鳴門市役所 1980、6-9］。

(9) これについては［鳴門市商工観光課 1973］および［鳴門市議会事務局 1974］を参照。

鳴門市が、「大規模な観光施設としてのドイツ村公園」を建設することによって、その周辺一帯は、第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜の遺産やドイツとの親善をテーマにした空間として創りあげられていった。例えば、この公園の近くにドイツ兵がつくったドイツ橋を模して、アーチ型石組みのドイツ橋をつくり、日独両国語で書かれた友愛の碑を建てた。また、ドイツ兵士の慰霊碑などに通じる遊歩道と広場を整備し、かつて俘虜たちが植えたといわれる 20 本あまりのセンダンの木を植え込み、収容所跡の赤レンガの基礎を生かしたフラワーポットやモニュメント台をつくった。

昭和 53（1978）年 12 月には、そうした鳴門市のまちづくりが西ドイツに認められて、同国大統領から谷光次鳴門市長に、功労勲章大功労十字章が贈られている。

ドイツ村公園の整備がほぼ完了したのは、昭和 50 年代後半に至った頃のことであった。

そして、70 年余りにわたる鳴門市の悲願であった大鳴門橋は、実に 8 年 11 か月におよぶ架橋工事を経て、昭和 60（1985）年 6 月 8 日に開通した[10]。

4　「なると第九」というブランドの確立とその今後の課題

4-1　「鳴門市の《第九》」のはじまりとその後の展開

「なると第九」の起源は、もちろん大正 7（1918）年のドイツ兵俘虜による演奏にまで遡ることもできるわけだが、その時に演奏された後は、その出来事は一般市民にはほとんど忘れ去られていた[11]。

その状況に変化が訪れるのは、昭和 56（1981）年春のことである。この時期、鳴門市では、一年後に予定される鳴門市文化会館のこけら落としについて、議論が交わされていた［林 1986、12］。様々な案が出たが、その中で浮上してきたのが《第九》演奏会という案であった［林 1986、12］。

鳴門市文化会館のこけら落としに《第九》演奏会を開催するという案が選ばれたときには、ドイツ兵俘虜によって板東俘虜収容所で《第九》が日本初演されたという話は、すでに証明されていたが[12]、一般にはまだ広く知られてはいなかった。

(10) 大鳴門橋の起工式は、昭和 51（1976）年 7 月 2 日に鳴門市側の架橋地点・鳴門公園千畳敷で行われた。

(11) 大正 7 年にドイツ兵俘虜によって《第九》が演奏された後、その出来事が一般市民にはほとんど忘れ去られていたという話は、鳴門市文化交流推進課から得た情報である。

(12) 昭和 53（1978）年 3 月に冨田は［冨田 1978］において、大正 7（1918）年 6 月 1 日に板東俘虜収容所で《第九》全曲の演奏会が開催されたことに言及しているが、これを日本初演とまでは記述していない。一方、林は同年 5 月に出版された［林 1978］において、大正 8（1919）年 10 月に徳島の新富座で行われたエンゲル楽団による《第九》演奏を、日本初演としている。林はその後の著作（［林 1986］）では修正を加え、大正 7（1918）年 6 月 1 日に板東俘虜収容所で行われた徳島オーケストラによる《第九》全

この時期は、「《第九》を歌う会」関連の団体が全国的にあちこちに作られて、一つのブームになった時代であった[13]。鳴門市では、そうした全国的な流れに乗って、鳴門市文化会館のこけら落ししとして《第九》を演奏することによって、板東俘虜収容所での《第九》初演の事実を広く知らしめ、鳴門市を《第九》初演のまちとしてアピールすることができると考えられた。鳴門市文化交流推進課の話によれば、こけら落ししとして、鳴門の地で日本初演された《第九》演奏会を開催することが決定したことには、谷光次鳴門市長の後押しがあったとのことである。この演奏会のために、昭和 56（1981）年 8 月 4 日に「鳴門市第九を歌う会」が結成された。

そして昭和 57（1982）年 5 月 1 日、鳴門市文化会館のこけら落ししとして《第九》演奏会が開催された。

《第九》演奏会は、こけら落としの時点では、毎年開催されると決まっていたわけではなかった。しかし、鳴門市では、これまで、ドイツ館やドイツ村公園の建設など、第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜ゆかりの地としてまちづくりが進められ、そうしたドイツとの「絆」を礎として姉妹都市リューネブルク市と親善が深められ、ドイツとの交流が「売り」にされてきた。《第九》を通じて、ドイツとの「絆」や交流をいっそう深め、まちをより発展させてゆくことができると考えられたことにより、鳴門市は、ドイツ兵俘虜による《第九》演奏会が大正 7（1918）6 月 1 日に開かれたことにちなみ、6 月 1 日を「第九の日」と定め、毎年 6 月第 1 日曜日に《第九》演奏会が開催されることとなった。こうして、「鳴門市の《第九》」がはじまった。

以後、鳴門市では、「ドイツ兵俘虜による《第九》初演の地」というイメージをつくりあげてゆくために、毎年開催される《第九》演奏会だけでなく、ドイツ館やドイツ村公園、リューネブルク市を中心としたドイツとの交流といった、それまでに培われてきたドイツとの結びつきを象徴するもの、さらにはドイツ兵俘虜の遺跡など、様々なものが活用された。

昭和 59（1984）年 12 月 2 日に大阪城ホールで開かれた「一万人の第九コンサート」（指

曲演奏が日本初演であると述べている。林によれば、この現在の定説が明確に証明されたのは、鳴門市文化会館のこけら落としに《第九》演奏会を開催する話が具体化してきた直後のことであった［林 1978、31-34］。

(13) 例えば、昭和 56（1981）年、宮城県の中新田町にバッハホールが完成し、これを記念して 5 月に町民主催の《第九》演奏会が開かれることになった［読売新聞 1981.3.20］。宇都宮第九合唱団は昭和 55（1980）年 5 月 27 日［宇都宮第九合唱団＞宇都宮第九合唱団について］、国技館すみだ第九を歌う会は昭和 59（1984）年 4 月 24 日に発足した［国技館すみだ第九を歌う会＞会について］。また、昭和 62（1987）年 7 月 29 日付の読売新聞には、各地の《第九》を歌う団体が合唱団員を募っていることに関する記事が掲載されている［読売新聞 1987.7.29］。

揮：山本直純）には、「鳴門市第九を歌う会」の団員約 200 人が、ドイツ館前広場から同時中継で特別参加した。

また、昭和 60（1985）年 9 月 4 日から 3 日間、リューネブルク市に親善使節団が滞在したのだが、そのうちの合唱団員と同地のリューネブルク・ヘルダー高校合唱団員との交歓音楽会がリューネブルク市庁舎で開催され、《第九》などを合唱した。

平成 5（1993）年 10 月には、ドイツ館が移築された。この事業が行われたのは、寄贈されたドイツ兵俘虜関連資料が許容量をこえたこと、そして建物の老朽化が進んだことなどが直接的な理由ではあったが［田村 2006、85］、昭和 57（1982）年にはじまった《第九》演奏会が軌道に乗り、「ドイツ兵俘虜による《第九》初演の地としての鳴門市」というイメージが定着してきたことも、新ドイツ館建設に拍車をかけたといえる。

平成 6（1994）6 月 3 日から 5 日まで、鳴門市は、新しく完成した鳴門市ドイツ館のオープンおよびリューネブルク市姉妹都市盟約締結 20 周年記念事業として、「ドイチェスフェスト in なると」を開催し、多彩なイベントが行われた。このイベントにあわせて、同年 6 月 2 日から 6 日まで、リューネブルク市からの親善使節団が鳴門市を訪問した。6 月 4 日には、第 13 回ベートーヴェン《第九》交響曲演奏会がドイツ館前広場に会場を移して開催され、初の野外公演となった。この演奏会には、使節団員のうち 19 名が合唱に参加し、「ドイツ兵士が「第九」交響曲を合唱して以来、70 年以上の歳月を経て、ドイツ人の歌声が「バンドー」の地に響き渡った」［鳴門市史編纂委員会（編集） 1999、405］。

平成 10（1998）年 5 月 31 日には、板東俘虜収容所跡地のドイツ村公園で、《第九》の日本初演の地であることを記念して、初演から 80 年ぶりに、演奏形態や服装に至るまで、大正 7（1918）年 6 月 1 日に行われたドイツ兵俘虜の演奏の模様を忠実に再現した「甦る第九演奏会」が行われた(14)。

平成 13（2001）年、《第九》演奏会が第 20 回を迎えたのを機に、鳴門市では、5 月 3 日からの 1 ヵ月間、「ドイチェ・ヴォッヘン（ドイツ週間）」と銘打って、ドイツ館において、「ドイツ兵収容所」と「日独交流」をめぐる一連のイベントを開催した。当時の全国の収容所を紹介する「写真展」、日独のメンバーによる「音楽会」のほかに、横田庄一郎による「記念講演」、「国内のドイツ兵俘虜とそれぞれの日独交流」という「パネルディスカッション」、「日独国際交流の未来を探る」と題した「シンポジウムと公開サミット」などが開かれた。

(14) ソプラノ独唱はソプラニスタが歌い、アルト独唱はカウンターテナーが歌った。合唱は男声 4 部に編曲されたものを歌った。

市制施行 50 周年を迎えた平成 9（1997）年、鳴門市では多彩な記念事業が行われているのだが、その一環として、6 月 17 日には、ドイツ館前広場でベートーヴェン立像の除幕式が行われた。このベートーヴェン像は、「「第九」国内初演の地である鳴門をアピールするとともに、文化の薫るまちづくりを進めるために制作」されたとのことである［鳴門市史編纂委員会 1999、230］。

平成 13（2001）年 2 月 9 日、新世紀の幕開けを記念して、平和と友情のシンボル《第九》をベートーヴェンの故郷ドイツで歌おうと、市民らがリューネブルク市の市立劇場で「第 1 回『第九』里帰り公演」を開催した。オーケストラはリューネブルク交響楽団、合唱は「鳴門「第九」を歌う会」67 人、リューネブルク市合唱団 20 人などで編成され、聴衆には元捕虜たちの子孫 52 名が招待された［鳴門市秘書広報課 2011.7、6］。

平成 15（2003）年 6 月末には、リューネブルク市と同じニーダーザクセン州のブラウンシュヴァイク行政区の招きにより、同市で「第 2 回『第九』里帰り公演」が実現した。この催しには、元俘虜の関係者 35 名が招待された［鳴門市ドイツ館史料研究会 2003.10.15、4］。この公演時には、多くのドイツ兵遺族から貴重な遺品を寄贈された［鳴門市ドイツ館史料研究会 2003.10.15、1-4］。

平成 18（2006）年 6 月 17 日には、板東俘虜収容所で《第九》の日本初演を行ったドイツ人俘虜と、収容所の所長・松江豊寿や周辺住民との心の交流を描いた映画《バルトの楽園》（出目昌伸監督）が日独同時公開された。この映画の制作費は 15 億円であったが、徳島県と鳴門市はこの映画に 1 億円を出資していた［読売新聞 2005.9.1］［朝日新聞 2006.3.6］。クライマックスの《第九》を歌うシーンの撮影には、地元のエキストラ 200 人も当時の服装で加わった［朝日新聞 2005.12.27］。この映画の撮影のために、鳴門市の郊外、板東地区のゴルフ場跡地約 2 万平方メートルに、当時の収容所を再現する巨大オープンセット[15]が建設された［朝日新聞 2005.12.27］。徳島で本格的なオープンセットが作られるのは初めてのことであった［読売新聞 2005.9.1］。

映画の公開に先駆けて、平成 18（2006）年 3 月 21 日からは、映画のロケセットを利用した「『バルトの楽園』BANDO ロケ村～歓喜の郷～」が一般公開された。8 月 6 日に入場者が 10 万人を突破した「BANDO ロケ村」には、同日も団体客ら 2000 人以上が訪れた［朝日新聞 2006.8.15］。このロケ村は鳴門市の新名所に加わり、映画の公開後、お盆休みと阿波踊り

[15] 収容所など約 30 棟のセットが立ち並び、実際の収容所の 75%にあたる大きさであった［読売新聞 2005.9.1］［朝日新聞 2005.12.27］。

が重なる時期には、県内外から訪れる観光客や帰省客らは例年の倍以上となり、市のドイツ関連施設がにぎわった［朝日新聞 2006.8.15］。鳴門市ドイツ館では 8 月 12 日から 14 日までの 3 日間、「ドイツビール・ワイン祭り」が開かれ、延べ約 2700 人が訪れた［朝日新聞 2006.8.15］。最終日の 14 日には館内のステージで、ベートーベンの《第九》に合わせた阿波踊りが披露された。ロケ村は、一般公開から半年で 13 万人を越えるほどの人気であったので、ドイツ館の入館者も 10 月で前年の 2 倍を超えた(16)［鳴門市ドイツ館史料研究 2006.11.30、4］［鳴門市ドイツ館史料研究会 2006.7.31、3-4］。

平成 18 年（2006）7 月 8 日、「道の駅 第九の里」がドイツ館の隣にオープンしたが、これは鳴門市内ではじめてつくられた「道の駅」であった。南側の「物産館」は、2 年前に国の「有形文化財」に登録された旧「バラッケ」(17)の一つを移築・復原したものであり、保存と地域振興を兼ねたこの鳴門市の取り組みは、文化財の保護という観点からみても効果的な方法であるとして、注目を集めた［朝日新聞、2006.6.24］。

この「第九の里」では、《第九》をモチーフにしたクリアファイルや一筆箋、第九クーヘン（焼き菓子）、ドイツ製の菓子やワイン、ビールなどが販売されている。

毎年開催される《第九》演奏会は、その規模が年々拡大してゆき、全国各地から鳴門市にたくさんの人を集め、地域を活性化する役割を果たすと同時に、鳴門市が「《第九》のまち」であることを鳴門市内外の人々に（再）認識させるものとして機能した。第 30 回演奏会の特集記事が掲載された『広報なると』平成 23（2011）年 7 月号によれば、「現在全国各地 70 団体以上 1000 人を越える会員の多くが〔6 月に開催される《第九》〕演奏会の出演のため、毎年鳴門を訪れてい」る、とのことである［鳴門市秘書広報課 2011.7、4］。

しかし、「鳴門市の《第九》」は演奏会だけで成り立っているわけではなかった。それは、《第九》演奏会を開催するようになった当初から、それ以前に築いてきたドイツ館やドイツ村公園、リューネブルク市との交流に象徴される「歴史あるドイツとの「絆」のまち」というイメージの上に、「ドイツ兵俘虜による《第九》初演の地」というイメージを重ねる形で形成されてきた。そして、「道の駅 第九の里」に旧「バラッケ」といったドイツ兵俘虜の遺跡が活用されたこともまた、「鳴門市の《第九》」イメージの構築に寄与した。

(16) ドイツ館の入館者数は、平成 15（2003）年度から平成 17 年度まで 3 万人前後であったが、映画《バルトの楽園》が公開された平成 18（2006）年度は 57,309 人、平成 19（2007）年度は 38,328 人であった。しかし平成 20（2008）年度はまた 3 万人前後となり、平成 25（2013）年度までは減少傾向にあった。しかし、その後《第九》アジア初演 100 周年に向けて増加してゆき、100 周年の年である平成 30（2018）年度には 35,999 人であった（ドイツ館の入館者数はドイツ館から得た情報による）。

(17) 「バラッケ」とは、板東俘虜収容所のドイツ兵下士官・兵卒用の兵舎のことである。

映画《バルトの楽園》は、集客に関しては一過性になってしまったが、第一次世界大戦時にこの地でドイツ兵俘虜と地元民との間に友愛の情が結ばれ、ドイツ兵俘虜によって《第九》が初演されたことを人々に強く印象づけるものとして作用した。

4-2 「なると第九」の設立とその「これからの 100 年」

このようにイメージ形成されてきた「鳴門市の《第九》」であったが、平成 30（2018）年に迎えた《第九》アジア初演 100 周年記念[18]の《第九》関連行事が企画された際に、それは新たな展開をみせることとなった。すなわち、《第九》演奏会と、第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜に関する施設や遺跡・資料、リューネブルク市を中心としたドイツとの交流などとを相互に連携させた「なると第九」というブランドが設立されたのである。「なると第九」は、実質的には、それ以前に行われてきたことの延長線上にあったのだが、《第九》演奏会とそれ以外の要素とが、より包括的に捉えられるようになった。

《第九》アジア初演 100 周年記念行事は、鳴門市をあげての一大イベントであり、その企画は早くも 4 年以上前から行われていた。平成 25（2013）年 12 月 20 日、産学官民で組織する「アジア初演『なると第九』ブランド化プロジェクト推進協議会」の設立総会が開かれた［鳴門市秘書広報課 2014.2、12］。アジア初演 100 周年は、鳴門市にとって、「なると第九」ブランドを構築・推進し、地域の活性化や文化の振興につなげる絶好の機会であった。

こうして「アジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクト」が企画されたのだが、このことには、国から交付金を受けるための申請したことが関わっていた。すなわち、このプロジェクトは、交付金申請に向けて策定されたものであった。この申請は国により採択され、平成 28（2016）年度から平成 30（2018）年度まで、鳴門市は、「「なると第九」および板東俘虜収容所の歴史を活用したローカルブランディングの推進事業」に対し、国から巨額の交付金を得ていた。「地方創生加速化交付金」は、平成 27（2015）年度に交付決定、事業実施は平成 28（2016）年度[19]、交付決定額 35,00 万円、交付対象経費も同額であった。「地方創生推進交付金」は、事業期間は平成 28（2016）年度から 30（2018）年度まで、平成 28（2016）年度は交付決定額 75 万円、交付対象経費も同額[20]、平成 29（2017）年度は交付決定額 15,798,000 円、交付対象経費 15,131,922 円、平成 30（2018）年度は交付決定額 14,750,000 円、

[18] このころには、専門家らの調査によって、大正 7（1918）年 6 月 1 日に板東俘虜収容所でドイツ兵俘虜によって開かれた《第九》演奏会は、日本だけではなく、アジアの初演であったことが確認されていた。
[19] 補正予算であり、年度末の決定であったので基本繰越予算であった。
[20] 地方加速化交付金での事業実施があったので、そこに重複しない部分での事業実施であった。

交付対象経費 14,556,200 円であった[21]。「なると第九」関連事業には、このような巨額の資金が動いていたため、この事業自体、交付金の助成との絡みで大規模に実施されたという面が強くあった。

この「アジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクト」という企画は、「市内にある観光資源、音楽文化、文化財産、交流の歴史を結びつけることで「なると第九」ブランドという一体的な魅力を創造し、また、個々の資源の魅力を増進することで、「なると第九」が持つ友愛の精神を国内外に広く発信することが求められてい」る、という認識のもとにはじめられた［アジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクト推進協議会 2014.12、3］。その実現のために、特に力を入れてゆくものの方向性を定めたものとして設定されたのが、環境整備部門、教育部門、観光・広報部門、「第九」アジア初演 100 周年記念演奏会運営部門の 4 つの部門であった［アジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクト推進協議会 2014.12、5］。

環境整備部門では、ドイツ公園内にある板東俘虜収容所跡地を中心に、ドイツ館やベートーヴェン像などの「なると第九」関連の観光資源を「一体的なものとして魅力ある環境づくりを進める」ことが求められた［アジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクト推進協議会 2014.12、7-9］。

教育部門では、市内の子どもたちが「義務教育課程修了時において「第九」第 4 楽章の最も有名な部分〔…〕の主旋律を原語で歌え、「第九」アジア初演の歴史的背景や道徳的な事象を理解し、本市〔鳴門市〕が「第九」アジア初演の地であることを郷土の誇りとして感じることができる学校教育を目指」すことが定められた［アジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクト推進協議会 2014.12、10-12］。

観光・広報部門では、「なると第九」に関連した観光・文化・歴史分野の多くの既存資源を活かした観光・商工的な事業や情報発信を行い、それによって鳴門市が「第九」アジア初演の地であり、またその背景には誇るべき歴史があったことを市民が理解するとともに、全国的に「第九」といえば鳴門と認識してもらえるよう、「なると第九」を PR してゆくことが目標とされた［アジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクト推進協議会 2014.12、13-15］。

「第九」アジア初演 100 周年記念演奏会運営部門は、その名の通りこの演奏会を運営する

(21) 各年度のそれぞれ年度の交付金の交付決定額および交付対象経費については、鳴門市文化交流推進課から得た情報による。

部門であったが、昭和 57（1982）年から 30 年以上にわたって実施されてきた演奏会の歴史は、「なると第九」を構成する重要な要素の一つであるという認識から、「アジア初演 100 周年を迎える 2018 年には、「なると第九」を、国内外に向けてより強く情報発信できる意義深い演奏会となるように」実施することが課題とされた［アジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクト推進協議会 2014.12、16-17］。

これらの部門にはリューネブルク市を中心としたドイツとの交流に関するものが含まれていないが、ドイツとの交流は、部門を設定するための根抵をなすものの一つであった。すなわち、いずれの部門も、板東俘虜収容所に関する歴史やドイツとの交流の歴史があるからこそ、実施の意義があるのであり、認知度の向上や交流の活発化につなげる手段となりうるのである[22]。

また、この企画には、鳴門市の外の人々に「なると第九」の魅力をアピールし、観光客を誘致するという目的と、鳴門市民が「なると第九」に誇りをもてるよう促し、地域を内から活性化するという目的の両者があったことがわかる。

いよいよ《第九》アジア初演 100 周年の年が明けた『広報なると』平成 30（2018）年 1 月号では、「「第九」アジア初演 100 周年を迎えて」と題した座談会の記事が掲載されており、そこでは、「「なると第九」を全国・世界に発信するため」の「記念事業」について、「市長とアジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクトを支える 3 人」が語り合っている［鳴門市秘書広報課 2018.1、2-5］。その「アジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクトを支える 3 人」とは、前鳴門市ドイツ館館長で現在資料アドバイザーの川上三郎、鳴門市日独友好協会会長でリューネブルク市への親善使節団団長を務める村澤由利子、認定 NPO 法人[23]鳴門「第九」を歌う会副理事長の頃安利秀である。このメンバーに象徴的に示されているように、「なると第九」とは、《第九》の演奏会、第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜に関する施設や遺跡・資料、リューネブルク市を中心としたドイツとの親善などを結びつけた、歴史的蓄積のあるドイツとの「絆」を礎とした《第九》というブランドなのである。

平成 30（2018）年 5 月 27 日にはじまった《第九》アジア初演 100 周年のイベントは、盛大に催された。その中でも特に大々的に行われたのは、「よみがえる「第九演奏会」」と題された、初演の日時に合わせて、初演と同様 80 人の男声合唱で、男性のみのソリストによっ

(22) これについては鳴門市文化交流推進課から得た情報による。
(23) 「鳴門「第九」を歌う会」は、平成 25（2013）年 11 月 25 日、県内初の認定 NPO 法人の認定証の交付を受けていた。

て演奏された演奏会（ドイツ館前広場で開催）、そして「第 37 回ベートーヴェン「第九」交響曲演奏会」（例年同様、鳴門市文化会館で開催）などであった。

《第九》アジア初演 100 周年の「記念式典」では、ドイツのクリスティアン・ヴルフ元大統領、リューネブルク市のウルリヒ・メドケ市長、鳴門市の泉理彦市長らによる「第九永遠なり」と題されたパネルディスカッションが行われ、元ドイツ兵の子孫を含む約 100 名が出席した。

こうした催しと連動して、ドイツ館では「「第九」アジア初演 100 周年記念企画展」が開かれ、板東俘虜収容所で《第九》が演奏された背景やそこに込められたメッセージについて市民がともに考え、発信すること、そして、それらを外から来た人々に認識してもらうことを目的に、《第九》初演の様子やベートーヴェンの《第九》作曲の背景などを紹介するパネルや関連資料が展示された。

また、「「第九」アジア初演 100 周年記念 なると第九ウォーキング」が開催され、ドイツ館やドイツ村公園内の板東俘虜収容所跡地など、「第九」ゆかりのスポットを巡りながら大麻町をウォーキングする企画が行われた。

このように、《第九》アジア 100 周年のイベントは、板東俘虜収容所のドイツ兵俘虜関連の施設や遺跡・資料など、そしてリューネブルク市を中心としたドイツとの交流といった、鳴門市とドイツとのつながりを象徴するものが総動員される形で催された。

一方、平成 28（2016）年には、《第九》アジア初演 100 周年イベントの企画と並行して、板東俘虜収容所関係史料（ドイツ兵の残したプログラムや書籍、撮影した写真等）を、「ユネスコ記憶遺産」（後の「ユネスコ「世界の記憶」」）に登録する取り組みがはじまっていた。この取り組みもまた、「アジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクト」の一環として行われ[24]、国からの交付金が注ぎ込まれた［地方創生推進交付金・地方創生加速化交付金実績］。要するに、「なると第九」のブランド化とは、《第九》の演奏会だけでなく、第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜の遺産の文化的価値を高めることなども含んでいるのであり、そのような包括的な事業に対して国から交付金が交付されたのである。当初の計画では、交付金を受けている間に「ユネスコ「世界の記憶」」登録を実現する予定であったが、それはかなわなかった。

[24] 鳴門市文化交流推進課の話によれば、板東俘虜収容所関係史料を「ユネスコ記憶遺産」に登録するこの取り組みは、先に挙げた 4 つの部門とは別立てで行われた。

平成 30（2018）年度に国からの交付金交付が終了した後[25]、「なると第九」をいかに盛り上げてゆくかということは、鳴門市の課題となった。

『広報なると』平成 30（2018）年 7 月号では、「第九」アジア初演 100 周年記念事業をふり返る特集記事が掲載されているのだが、そこには「これからの 100 年」と題された次のような文章が記されている。

> 板東俘虜収容所から始まった友愛の精神と「第九」は、100 年後、「鳴門の宝」となりました。これからは、私たち一人ひとりが、この宝を次世代に伝える役割を担うことになります。もう、次の 100 年は始まっています。［鳴門市秘書広報課（編集） 2018.7、3］

『広報なると』の前号にも、「次の 100 年に向けて」という言葉が掲載されているのだが［鳴門市秘書広報課 2018.6、3］、要するに、鳴門市では、《第九》アジア初演 100 周年記念を単発のものに終わらせてしまうことなく、この 100 周年記念を梃子に、「なると第九」を鳴門市の財産として、地域をいっそう活性化してゆきたい、と考えられていたのである。このような意志は、翌年の《第九》演奏会に関する『広報なると』の記事にもみられる[26]。

こうしたことの背景には、鳴門市が、大鳴門橋や明石海峡大橋[27]など、交通網が整備されたことによって、観光客が鳴門市に滞在せずに素通りしてしまうという問題、そして、地方から都会へ人口や消費者が流出してしまう「ストロー現象」と呼ばれる課題に直面していることがある。そのための施策の一つが、《第九》アジア初演 100 周年記念事業だったのであり、それを次の 100 年へとつなげてゆく試みなのである[28]。鳴門市は、そうした施策を通じて、「鳴門」の魅力を市内外に発信してゆく必要にかられているのであり、その状況は現在も続いている。

(25) それに伴って平成 31（2019）年 3 月 22 日に「アジア初演『なると第九』ブランド化プロジェクト推進協議会」が解散し、その事業は鳴門市文化交流推進課に引き継がれた。

(26) 「なると第九は次の 100 年へ」［鳴門市秘書広報課 2019.5、22］、「「第九」初演から 101 年次の時代へ」［鳴門市秘書広報課 2019.7、1］といったフレーズを参照。

(27) 明石海峡大橋の起工式は、昭和 61（1986）年 4 月 26 日に淡路島北端の架橋地点・兵庫県津名郡淡路町岩屋の海岸で行われ、平成 10（1998）年 4 月 5 日に開通した［鳴門市史編纂委員会 1999、366-367］。

(28) 同時期に持ち上がった「鳴門海峡の渦潮」の世界遺産化の話もまた、そうした施策の一つである。平成 30（2018）年 4 月に鳴門市から発行された観光パンフレット『NARUTO TRAVEL GUIDE ［観光ガイドブック］』の表紙に書かれているキャッチコピーは「歓喜の歌渦巻く鳴門」であり、鳴門市の「売り」である「《第九》」と「うず潮」が組み合わされた言葉となっている［鳴門市 2018.4］。

おわりに

鳴門市では、「なると第九」を「第一次世界大戦時から受け継がれてきた遺産」とするような文言がしばしばみられる[29]。「なると第九」は、たしかに第一次世界大戦時まで遡ることができるのだが、ドイツ兵俘虜との交流も、板東俘虜収容所での《第九》演奏会も、第一次世界大戦後、しばらくの間は忘れ去られていたのであり、「再発見」されたのである。

「なると第九」というブランドの発端は、間接的には、板東俘虜収容所跡に住んでいた高橋春枝が「ドイツ兵の慰霊碑」を 13 年間にわたって清掃していたことが公に取り上げられ、それによって元俘虜やその子孫と大麻町民との交流が復活したことであった。その動きは、やがて鳴門市の行政レヴェルで取り上げられることとなり、ドイツ館の建設、リューネブルク市との姉妹都市盟約締結といったことに代表されるドイツとの親善に発展してゆき、さらにはドイツ館を含む裏山一帯をドイツ公園として整備してゆくことにつながった。

「なると第九」の直接の起源は、昭和 57（1972）年 5 月に鳴門市文化会館のこけら落としとして行われた《第九》演奏会だが、この《第九》演奏会が以後毎年行われることとなった背景にあったのは、ドイツ館やドイツ村公園など、それまでに推し進めてきた第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜ゆかりの地としてのまちづくり、そして、それを礎とした姉妹都市リューネブルク市との親善やドイツとの交流という鳴門市の「強み」であった。

以後、鳴門市では、「ドイツ兵俘虜による《第九》初演の地」というイメージをつくりあげてゆくために、毎年開催される《第九》演奏会だけでなく、ドイツ館やドイツ村公園、リューネブルク市を中心としたドイツとの交流といった、それまでに培われてきたドイツとの結びつきを象徴するもの、さらにはドイツ兵俘虜の遺跡など、様々なものが活用された。

そして、鳴門市では、平成 30（2018）年に《第九》アジア初演 100 周年を迎えるにあたり、国から交付金を受けるために、毎年 6 月の《第九》演奏会と、第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜に関する施設や遺跡・資料、ドイツとの交流などとを相互に連携させた「なると第九」という独自のブランドが発案され、「アジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクト」が策定された。交付金申請が国に採択されたことにより、《第九》アジア初演 100 周年のイベントは「なると第九」を鳴門市内外に発信する絶好の機会として、盛大に催された。

[29] 例えば、『広報なると』平成 23（2011）年 7 月号には、「『鳴門の第九』というブランド」が「第一次世界大戦時からつづく世界に誇れる平和と友情の象徴」という言葉で表現されている［鳴門市秘書広報課 2011.7、1-7］。

このイベントには、板東俘虜収容所のドイツ兵俘虜関連の施設や遺跡・資料など、そしてリューネブルク市を中心としたドイツとの親善といった、鳴門市とドイツとのつながりを象徴するものが総動員された。また、その「プロジェクト」の一環として、板東俘虜収容所関係史料を「ユネスコ記憶遺産」（後の「ユネスコ「世界の記憶」」）に登録する取り組みが進められ、この取り組みにも国からの交付金が注ぎ込まれた。

国からの交付金交付が平成 30 年度に終了した後、鳴門市では、「なると第九」をいかに盛り上げてゆくかが問われている。100 周年記念イベントを単発の打ち上げ花火に終わらせてしまうことなく、それを梃子にして「なると第九」による地域活性化をいっそう進めてゆくためには、新たな施策を打つ必要に迫られているといえるだろう。

参考文献

・『広報なると』

鳴門市秘書広報課（編集）

2011.7　『広報なると』（徳島：鳴門市秘書広報課）

鳴門市秘書広報課（編集）

2014.2　『広報なると』（徳島：鳴門市秘書広報課）

鳴門市秘書広報課（編集）

2018.1　『広報なると』（徳島：鳴門市秘書広報課）

鳴門市秘書広報課（編集）

2018.6　『広報なると』（徳島：鳴門市秘書広報課）

鳴門市秘書広報課（編集）

2018.7　『広報なると』（徳島：鳴門市秘書広報課）

鳴門市秘書広報課（編集）

2019.5　『広報なると』（徳島：鳴門市秘書広報課）

鳴門市秘書広報課（編集）

2019.7　『広報なると』（徳島：鳴門市秘書広報課）

鳴門市役所 市長公室（編集）

1975　『広報なると 昭和 50 年』（徳島：鳴門市役所）

鳴門市役所 市長公室（編集）

1978　『広報なると 昭和 53 年』（徳島：鳴門市役所）

・『鳴門市ドイツ館館報 ルーエ』

鳴門市ドイツ館史料研究会（編集）

2003.10.15　『鳴門市ドイツ館館報 ルーエ』第 7 号（徳島：鳴門市ドイツ館）

鳴門市ドイツ館史料研究会（編集）

2006.7.31　『鳴門市ドイツ館館報 ルーエ』第 15 号（徳島：鳴門市ドイツ館）

鳴門市ドイツ館史料研究会（編集）

2006.11.30　『鳴門市ドイツ館館報 ルーエ』第 16 号（徳島：鳴門市ドイツ館）

・その他

アジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクト推進協議会（編集）

2014.12　アジア初演「なると第九」ブラント化プロジェクト 基本計画（徳島：アジア初演「なると第九」ブランド化プロジェクト推進協議会）

岩村武勇（鳴門市教組教育会社会科研究部・代表者）

1950　『鳴門市の姿』（徳島：徳島新聞社出版局）

田村一郎（編著）

2006　『「どこにいようと、そこがドイツだ」』（徳島：鳴門市ドイツ館）

冨田弘

1978　「板東俘虜収容所新聞－資料紹介 3－」『愛知県立大学外国語学部 紀要』第 11 号 言語・文学編（愛知：愛知県立大学）、139-164

鳴門市

2018.4　『NARUTO TRAVEL GUIDE 「歓喜の歌渦巻く鳴門」［観光ガイドブック］』（徳島：鳴門市）

鳴門市議会事務局

1974　『市勢のしおり』（徳島：鳴門市議会）

鳴門市史編纂委員会（編集）

1999　『鳴門市史 現代編 1』（徳島：鳴門市）

鳴門市商工観光課（編集）

1973　『〈観光ガイド〉鳴門』（徳島：鳴門市商工観光課）

鳴門市役所

1953　『市勢要覧 1952』（徳島：鳴門市役所）

鳴門市役所

1980　『鳴門 '80 市勢要覧』（徳島：鳴門市役所）

林啓介

1986　『望郷のシンフォニー 「第九」日本初演事情』（大阪：長征社）

新聞記事

朝日新聞

2005.12.27　ドイツ人捕虜と日本の交流 映画「バルトの楽園」 TV「ドイツからの贈りもの」

朝日新聞

2006.3.6　（旬に聞く インタビュー）吉田秀一さん 映画作り協力のねらいは／福島県

朝日新聞

2006.6.24　実物バラッケ、道の駅に移築 90 年前独兵が生活、鳴門に来月オープン／徳島県

朝日新聞

2006.8.15　ドイツ人気でにぎわい お盆と阿波踊り重なって観光増 関連施設は倍以上／徳島県

読売新聞

1981.3.20　田園の町に「第 9」響く 芥川さんタクト 農家主婦ら 120 人 宮城・中新田

読売新聞

1987.7.29　歓喜の合唱 第九に挑戦 団体あちこち 仲間募ってます＝見聞き

読売新聞

2005.9.1　映画「バルトの楽園」巨大セット建設着々 11 月上旬、徳島ロケへ＝徳島

ウェブサイト

渦の国 鳴門｜鳴門市シティプロモーションーNaruto（2021.1.21.19:10 閲覧）

https://www.city.naruto.tokushima.jp/promotion/

宇都宮第九合唱団＞宇都宮第九合唱団について（2021.1.21.19:11 閲覧）

https://www.utsunomiyabet9.com/profile

国技館すみだ第九を歌う会＞会について（2021.1.21.19:12 閲覧）

https://www.5000dai9.jp/blank-4

地方創生推進交付金・地方創生加速化交付金実績（2021.1.21.19:12 閲覧）

https://www.city.naruto.tokushima.jp/_files/00172790/h28jisseki.pdf

鳴門市公式ウェブサイト なると第九（2021.1.21.19:12 閲覧）

https://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/daiku/

浜松フロイデ合唱団＞フロイデ豆知識＞第 8 回 日本で初めて「第九」が演奏された場所 板東俘虜収容所（2021.1.21.19:13 閲覧）

http://www.freude.or.jp/?page_id=681

File: Emblem of Naruto, Tokushima svg.-Wikimedia Commons（2021.1.21.19:13 閲覧）

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Emblem_of_Naruto,_Tokushima.svg

（博士課程 2 年　音楽教育学）